

女子高生 のための 文章図鑑

金子景子 編
川口晴美
紅野謙介
朴裕河



筑摩書房

女子高生のための文章図鑑

金井景子 川口晴美 紅野謙介 朴裕河 編

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

筑摩書房

編者略歴

金井景子（かない けいこ）

1957年大阪府生まれ，青山学院女子短期大学・武蔵野女子大学講師。

川口晴美（かわぐち はるみ）

1962年福井県生まれ，詩人。詩集『綺羅のバランス』『デルタ』など。

紅野謙介（こうの けんすけ）

1956年東京都生まれ，日本大学助教授，国語教科書編集委員。

朴 裕 河（ぱく ゆーは）

1957年ソウル生まれ，日本近代文学研究者，NHK国際放送アナウンサー。

女子高生のための文章図鑑

一九九二年六月十五日 初版第一刷発行

編 者／金 井 景 子

川 口 晴 美

紅 野 謙 介

朴 裕 河

発行者／関根栄郷

発行所／株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前二一六―四

電話東京五六八七―二六八〇（営業）

五六八七―二六七〇（編集）

振替口座東京六一四―二三

郵便番号一一一―九一

印刷・製本／中央精版

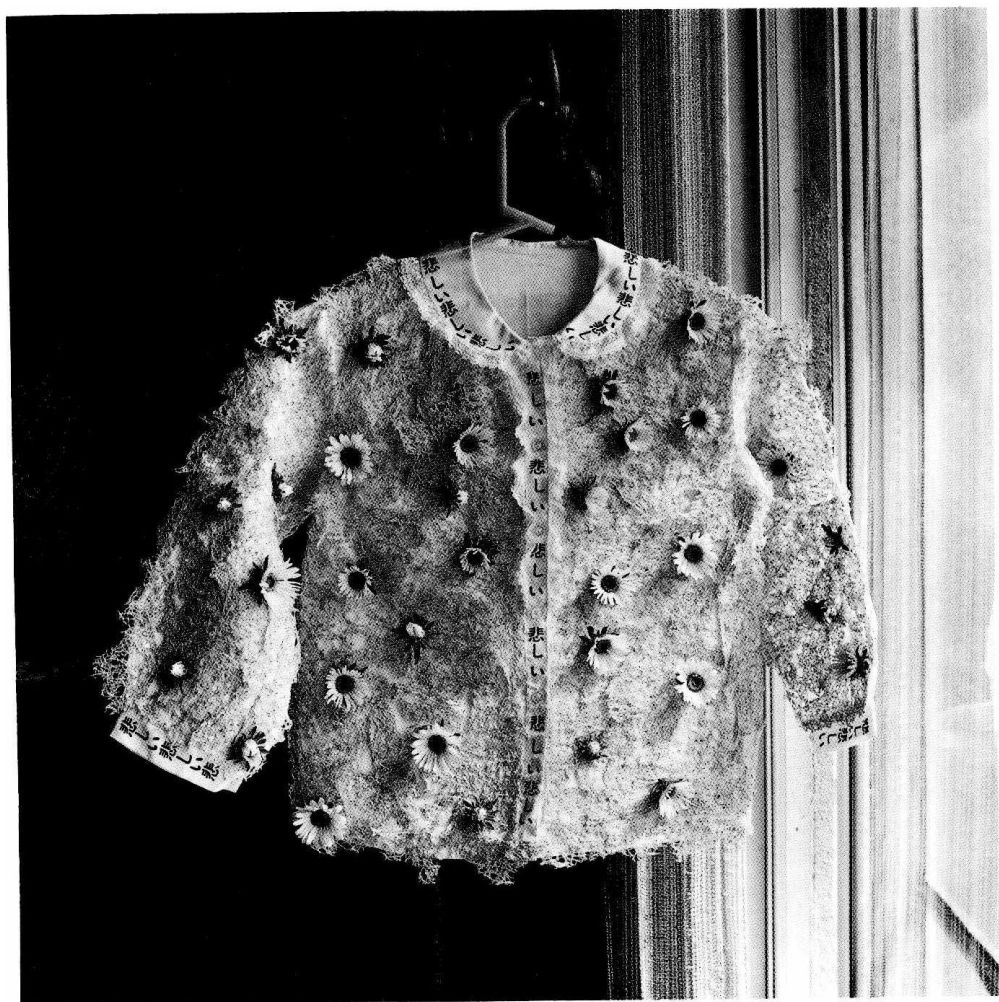
乱丁・落丁の場合は、御面倒ですが小社読者係あてに御送付ください。送料小社負担にてお取り替え致します。

©1992 金井景子・川口晴美・紅野謙介・朴 裕 河

ISBN4-480-91713-6 C7095



鶴に乗った女 撮影者不詳 明治中期 石黒コレクション蔵



悲しいブラウス 今 道子 1985

はじめに

——扉を開くアリスたちへ

小さいころ、図鑑を見た時の楽しさを覚えているだろうか。人によって動物・鳥・魚・植物・昆虫、好みはいろいろだったと思うけれど、ページを繰るたびに不思議な連中が現われて、ドキドキしたあの時のことを。

おサルと言ったら日本猿とチンパンジーぐらいしか知らなかったのに、ずいぶんいっぱい仲間がいてマンドリルという奇妙な名前と、顔が色とりどりの冗談みたいな写真に出会って大笑いしたこと。怖くて絶対開くまいと思っているのに、なぜだか必ず「ムカデのなかま」のページが開いてしまつて悲鳴をあげたこと。「さくら」とだけ呼んでいたものに「ソメイヨシノ」という本名があつたんだと一つ物知りになつたような気分を味わつたこと。「わたしはこれが好き」とか「こいつは森の悪者だよ」などと絵や写真を指さしながらページを繰ることで、私たちはこの世界がとてつもなく雑多で豊かであることを予感していたのだと思う。

ものごころがついて、さて「どんな大人になろうかな」と考え始めた時、私たちはどうやってそのモデルを探してきただろうか。実生活のなかで出会える大人の数には限りがあるから、いきおい本のお世話になる。が、高校の教科書ひとつを取ってみてもそこに登場する主人公は圧倒的に男であることが多い。『羅生門』の下人も、『こころ』の「先生」も、『舞姫』の太田豊太郎も、

みんな男の人。評論や随筆のところでも、女の人の文章に出会えるチャンスは思いのほか少ないのだ。「男も女もない、人間としていかに生きるべきかを学べばいいんだ」という乱暴な意見もあるけれど、女性にとって、からだの上でも心の中でも女として生きることを意識せざるを得なくなる季節に、主人公にしか出会えないというのは、とても不自由で貧しいことではないか――。この本は、そんなところから出発している。

この『文章図鑑』は、好き嫌いはそれぞれにあるとしてもまずはたくさんの女主人公に出会い、女の人たちの発するさまざまな表現を受けとめるための場所である。まずは「へえー、いろいろなあ。こんなこともあるのか」と楽しんでもらいたい。その上で、これからの長い人生を、周りのそしてまだ見ぬ多くの女たちや男たちとのびのび共生していく、知恵と勇気と自分のことばを養ってもらえたらなと欲深いことをもくろんでいる。

『女子高生のための文章図鑑』と銘打ってはいるが、これを手に取るあなたがうんと昔の女子高生でも、おきて破りの男子高生、あるいはもと男子高生だったひとでもかまわない。いや、むしろそれは願ってもない嬉しいこと。「何が書いてあるんだろう」とこれを開いた貪欲な好奇心とゆとりある感受性こそ、ここに登場する女主人公たちの生き方からより豊かなメッセージを抽出す原動力であると、編者は考えている。

とはいえここにあなたが共感を寄せるモデルが必ずいるとは限らない。とりあえず、たくさん読んで考えて迷うこと。すべてはそれからだ。『不思議の国のアリス』がそうしたように、まずは目の前の扉を開けることから始めよう。

目次

はじめに

I 「わたし」って何？

苗木を越えて——柴門ふみ 1

朝礼——井坂洋子 2

幸福のゲーム——吉田加南子 4

女の子が20歳になるまでに
知っておかなければならない7つの常識——橋本治 8

僕——Me, the Tough Guy——キトレッジ・チェリー／栗原葉子・中西清美訳 15

放浪記——林芙美子 17

〔休み時間1〕——一生で一番長くつきあう人間を探す旅 20

II おとなにはなりたくない？

あい色神話——大和和紀 22

手を清潔にしたい
そして髪をかきあげたい——榊原淳子 23

女というものは……— 増田みず子 27

シンデレラの靴— 富岡多恵子 31

鮎— 岡本かの子 38

ポートルート×20— マグダレーナ・アバカノウィッチ／小田るな訳 45

〔休み時間2〕わたしでありたい、わたしになりたい 54

III ことば、使ってる？

英語 日本語 カノコ語— 伊藤比呂美 56

若い語り部— 石井桃子 60

少年少女小説について— 金井美恵子 64

現代詩の理解— 鈴木志郎康 68

『フランケンシュタイン』序文— メアリー・シェリー／森下弓子訳 72

山下さゆり流ジコマン手紙の見分け方— 内田春菊 77

〔休み時間3〕言葉を大事にすることは「わたし」を大事にすること 80

IV 大切なひとはだれ？

わたしの母・わたしの子— 森崎和江 82

V

好き、それから？

仰臥漫録	正岡子規	87
おとうと	幸田 文	89
女友だち	海老坂武	93
夜の触手	上野千鶴子	97
木を植えた人	ジャン・ジオノ／原みち子訳	100
〔休み時間4〕身近だけれど遠い、遠いけれど身近な人たち		106

VI

何をしよう？ 何をしよう？

たけくらべ	樋口一葉	108
落日——対話篇	辻 征夫	112
明暗	夏目漱石	115
満たされないもの	石坂 啓	121
声の劇場	山田 太一	125
男女均等・上級講座	宮迫千鶴	130
〔休み時間5〕確かな関係のために		137

VII

わたしは世界のどっくにいるの？

- 性悪女——近藤ようこ 140
- 醒めて、怒れ！——寺山修司 142
- ゆっくり東京女子マラソン——千刈あがた 145
- 海からの贈り物——アン・M・リンドバーグ／吉田健一訳 152
- 「死への準備」日記——千葉敦子 156
- 霧の中のゴリラ——ダイアン・フォッシー／羽田節子・山下恵子訳 160
- 〔休み時間6〕自分の選択を生きる 166
- 林——姜恩喬／茨木のり子訳 168
- 花嫁のアメリカ——ナナ・ヒル——江成常夫 170
- イタリアに咲いた蓮の花 ラグーザ・玉——若桑みどり 176
- 娘巡礼記——高群逸枝 182
- 遊覧日記——浅草花屋敷——武田百合子 188
- 老太婆の路地——林京子 193
- 〔休み時間7〕こんなところに世界があつた 201

VIII

彼女のこと、知ってる？

ゆっくりはいつておいでませ——川田 絢音 204

娘時代——シモーヌ・ド・ボーヴォワール／朝吹登水子 訳 206

山の動く日——与謝野 晶子 211

マリリン・モンロー——向田 邦子 213

越後瞽女日記——キクエ——斎藤 真一 217

左ききの卒業式祝辞——アーシュラ・K・ル＝グウィン／篠目清美 訳 223

〔休み時間8〕みんなの声が聞こえる 228

表紙 靴デザイン 高田喜佐
章扉カッター 小宮山裕

I
「わたし」って何？



しかし……

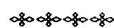


どこで
計算が狂ったのか
わたしはスーパーマンに
成り損ない
髪の毛も
のびてしまっていた

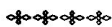
柴門ふみ「苗木を越えて」

朝礼

井坂洋子



制服を着て集まっているところは、全体が一匹の大きな動物のように見えるかもしれない。元気な、それでいてどこか危ういところのある生まれだての命。しかも、その中のひとりひとは皆ちがう個性を持っていて、いろんなことを考えながら生きている。



雨に濡れると

アイロンの匂いがして

湯気のこもるジャンパースカートの

箱襷に振れた

糸くずも生真面目に整列する

朝の校庭に

幾筋か

濃紺の川を流す要領で

生白い手足は引き

貧血の唇を閉じたまま

出典『朝礼』（紫陽社）。



もある。

写真／千葉
浩志撮影

安田さん まだきてない
中橋さんも

体操が始まって

委員の号令に合わせ

生殖器をつぼめて爪先立つたび

くるぶしにソックスが皺寄ってくる

日番が日誌をかかえこむ胸のあたりから

曇天の日射しに

ゆっくり坂をあがってくる

あの人たち

川が乱れ

わずかに上気した皮膚を

濃紺に鎮めて

暗い廊下を歩いていく

と窓際で迎える柔らかなもの

頬が今もざわめいて

感情がささ波立っている

訳は聞かない

遠くからやってきたのだ

幸福のゲーム

よしだ
吉田加南子

※※※※※
今日はどんな服を着てゆく？ 朝、起きて迷うのはいつもそれ。人を見るとき、着ているものからまず判断してしまうこともある。みんなTPOにあわせて着ているのだけだと、わたしと服の関係はいつたいていどうなっているのだろう。
※※※※※

服を選ぶとき、わたしたちはその服の語る物語を選んでいる。あるいは、服から生まれる音を聞きながら、物語、あるいはイメージを作っている。服から、物語、イメージを汲みだしている。

薔薇色の絹のワンピースに手を通すとき、わたしの体は、絹の、あるともないもしれぬなめらかさに吸いとられてゆく。とけてゆく。そして同時にわたしの心は、物語にとけてゆく。優雅な女、という物語、あるいはコケティッシュな女という、物語に。

あるいは、黒いカシミヤのセーターに包まれるとき、わたしはカシミヤの呼吸する柔らかさに、そして、女らしい女、という物語に身を委ねている。

わたしは、とけている。服をまとうこと、服に包まれること、あるいは服によって露出することによって。いつものわたし、さっきまでのわたしではない、新しいわたし、という物語に。あるいは、わたしの奥底に眠っているほんとうのわたし、という物語。



出典 ソニア・リキエル『祝祭』（青土社）。

コケティッシュ coquettish こびを売るような、なまめかしい。
カシミヤ cashmere カシミヤヤギの柔らかい毛で織った布地に似せた婦人服用の毛織物。

吉田加南子（一九二〇—）詩人・仏文学者。学習院大学助教授。詩集に『仕事』『匂い』、翻訳書にはM・デュラス『アガタ』や『イヴ・サン・ローラン—イメージとデザイン』、『デュブーシェ詩集』などがある。最近の詩集『つゆ』では、極端に言葉を切りつめた果ての空白の拡がりに詩的世界を開いて注目される。本文はファッション・デザイナー、ソニア・リキエルの文集の解説として書かれた。

とけている。わたしはすでに、わたしではない。

わたしであって、わたしではない。

わたしであって、しかし、それはもう、わたしには届かない。

とけている。

とけている、とかされている、という幸福。

とけている、という、無重力状態。夢のなかでのような。あるいは、記憶によって甦らされた子供時代のような。

た子供時代のような。

幸福——とけている。

ただし、演ずることによって。自分が演じ、同時に、自分に物語を作ってやること、その物語を演出してやることによって。

自分と他者とのあいだを舞台として。ただし、演ぜられる物語は、他者を突きぬけて、他者の後ろ、他者のさらに向こうにまで届くのでなければならぬ。他者ではないわたし、すでにわたしではないわたし、他者でもなくわたしでもない、いわば宙に浮かんでいるわたしへと、物語は戻ってこなければならぬのだから。あるいは、——それが幸福であるためには——、めぐりながら物語は、わたしではないわたし、とけてしまつてわたしにはもうつかまえられるな

いわたしを、つかまえ、引つ張つてゆかなければならぬのだから。

幸福。とけてゆくこと。フランス語でいえば、「わたし」という主語 *je* から、無名の主語 *on* へと、とけてゆくこと。あるいは、わたしでしかない「おのれ」*moi* から、わたしでもありあなたでもあり、彼でもあり彼女でもある「おのれ」*soi* へと、とけてゆくこと。

とけるものがとけて伝わってゆく、道である。服。"moi" と "soi" のあいだにあって、つ

je 「私は」を意味する人称代名詞。

英語の *I* に当たる。

on 一般的に「人」を意味する不定代名詞。人称代名詞の主語の代用もする。

moi 「私」を意味する人称代名詞。

英語の *me* に当たる。

soi 「自身」を意味する人称代名詞。男性・女性、単数・複数を受けて同じ形。